

献ませでもらった時にバレてしまったので小刀を献上した。神宝は神符(石上神宮の神庫らしい)に入れた。しばらくして舐けてみると小刀はながった。清彦に聞くと昨夕、刀は私の家に帰ってきたが、今日どこか行ってしまったと答えた。出石の刀は自然に淡路島にきたので、島民が刀の島に祠を建てた。

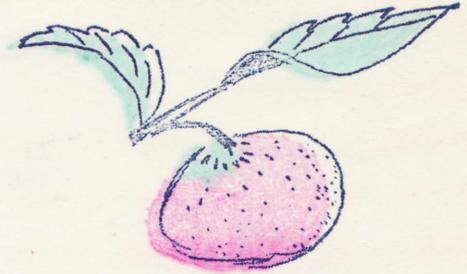
昔、人がいて船にのつて但馬の国へ来た。聞くと「新羅の王子天日槍だ」と答えた。但馬に住んで前津アサマ、(ある本に前津見、別の本に太耳)の女、麻花マツノハ飛鳥を嫁にして但馬諸助を生んだ、これは清彦の祖父である。

解説

前には日矛が宝物を献上したと書いてあったのに、本当は宝物は出石にあつたことがわかる。清彦が宝物を献上したのは出石族が大和朝廷の支配下に入ったのだとも解説出来るし、朝廷が出石族の宗教を受け入れたのだとも考えられる。出石小刀が倉から出て行ったのは、出石小刀は特に宗教的な刀に秀れていたからだとも考えられる。

淡路島には生石神社が由良の生石崎にあつて、出石小刀を祭っている。生石は出石が、なまったものとされている。

後半の記事は、日矛が来たという話



が重複して書かれている。資料を未整理のまま書いたのであろうか？

垂仁記は神宝の献上の話が多いのが特色である。物部氏の神宝が日矛の神宝と似ているのも注目に値する。

Ⅱ-4 田道向守

(垂仁紀90年2月)天皇は田道向守トコヨクニに命令して常世国に行かせて非時トキジクの香粟カクノミを求めさせた。これは橘のことである。99年7月天皇は140才で亡くなった。次の年の3月、田道向守は常世国から非時香粟をもって帰った。田道向守は天皇が亡くなったのを悲しんで「命令をうけて、はるか遠くの国へ行ってきた。浪をこえて海を渡った。

常世国は仙人の秘れている国で、普通の人の住む所ではない。それで往復している間に10年になってしまった。一人で、一人ですごい浪をこえて、又帰ってこれるとは思えなかつたが、聖帝の壘

はぶつて、かろうじて帰ってくる事が出来た。所が天皇はおこくなりになっていて報告することが出来ない。私が生きて帰ってきたといっても何の鳥であろうか、といって天皇の陵に向つて、泣き叫んで死んでしまった。人々は痺いて皆涙を流した。この田道間守は三宅連の始祖である。

解説

常世の国には長寿の業があるなどと言うのは 神仙思想であつて、日本書紀が作られた頃に神仙思想が流行していたので、その思想で書かれている。垂仁天皇は長寿なので田道間守の話と結びつけられたのであろう。

日本書紀の記事は古事記よりも神仙思想が強く、又、忠君愛国の思想がはつきり出ている。三宅連が祖先が反乱を起しているのを隠す為には田道間守を祖先にして忠臣であるという話にした。又朝廷にとつても忠君愛国の思想を広める材料とした。

こうして出来あがつた「忠臣タジマモリ」は千二百数十年たつてからも軍国教育で利用されるのである。なんと恐ろしいことであろうか。

「タジマモリ」の原形は昔、但馬の一族でタジマモリという人がいて、航海

術に秀でていて海外へよく出かけた。と、いう程度のものであつたのではないだろうか？。 垂仁天皇は長寿であつたが日矛の方は、日矛から5代目の田道間守ができてきている。このことから日矛の話は垂仁紀の中に作画的に入れられたことがわかる。

参考図書

日本の中の

朝鮮文化

第32号

シンポジウム

○天日槍をめぐつて

○天日槍の道 ----- 鄭 貴文

○古代但馬文化... 林屋長三郎

第33号

座談会

伊都国と朝鮮をめぐつて

★尚33号のP13-----

文和・宇智の渡来文化は

10月のコースですので是非参考にし

て意見を本投稿お持ちしております。

III 風土記の中の アメノヒボコ

- ・ ヒボコの話は播磨風土記に多く出てくるが播磨は朝鮮からの渡来が多く先住者との争いも多く、ヒボコとアシハラシオヤ ^{イワノ オオカミ} 伊和大神との争いの話として伝えられたのであろう。話は、ほとんどが地名の由来の説明なので重要なもののみを紹介する。

III-1 播磨風土記

(1) ^{ウツダ}奪谷は、^{シゴク}芦原志許乎命と天日槍命が、この谷を奪いあつた。それで奪谷というのである。奪いあつたので谷の形が曲れる巻のようになっている

解説 2人の神の戦として述べられているが、各々の神を信仰する集団の戦いである。芦原志許乎命は芦原^{シゴク}醜男命とも書くが、^{アノトコ}醜男であつたのではなく醜は力の強いことを表している。大國主命の別名であるとされている。

(2) 麻打山という所は、昔、但馬

の国の人、伊豆志君麻良比がこの山に住んでいた。

2人の女が、夜に麻を打っていたり、やがて麻を自分の胸において死んでしまった。それで麻打山と名付けた。現在、この辺に住んでいる人は夜は麻を打たないのである。

解説 出石君は日矛の子孫の氏族であり但馬から移動してきたと思われる。山陰側の勢力が山陽側へ移動したという説があり参考になる。

(3) ^{いばのおか}粒丘 ^{からくに}天日槍命が韓國からやってきて揖保川の河口にやってきて着る所が欲しいと思って芦原志許乎命に許しを乞うた所が芦原志許乎命は海の中を許した。(土地をよえず、上陸させなかつた) その時、天日槍命は剣きもつて海水をかきまわして着た、芦原志許乎命は、その激しい行爲に恐れ、先に国を占有しようとして粒丘に登って食事をした。口から粒が落ちたので粒丘と言うようになった。この丘の小石は粒の形によく似ている。

解説 剣で海水をかきまわ

して楢という語は出雲の国ゆずりの
タケミカマツハコト
 時に建御雷命がした行爲と似ている
 が、日楢の話の方が神話として古い
 形をしている。日本の国が出来るとき
 、天沼矛をドロドロした海へ入れて
 、かきまわし、引きあげたら先からしずく
 が落ちてオノコロ島になったという話も
 日矛の神話と同類である。

(4) みかた 御方の里。 芦原志許乎命と
 天日楢命がシニミダツ心爾者(生野の山)に来て
 、黒葛を三條もつて足につけて採り
 ました。芦原志許乎命の黒葛はツツラ ヒトカタ一
 條はフタ但馬の文多に落ち、一條はヤブ養父に落
 ち、もう一條はこの村に落ちた。

それでミカタ三條という地名になった。天
 日楢命の黒葛は皆、但馬の国に落ちた
 。それで但馬の伊豆志の上地を所有し
 た。

解 説

これは占居地を決める
 呪術的な方法である。二人の争いはど
 ちらが勝ったのか?。日楢は播磨に来た
 後に但馬に行っているので播磨から山を越
 えて但馬に行つたという説もある。

わかおか いわのわかみ
 (5) 米叟阿 伊和文神と天日
イサ アイサカ
 杵命と二人の神が軍を起して相戦
 つた。その時、伊和大神の軍が集ま

て箱をついた、そのツカ穀が集つて丘をつた
 。又、ふるつて除いた穀が山のように、
 なつているのでツカ墓(塚)とキムレ言い、又 城牟礼山
 という。一説では城を作つたと伝える所
 は、応神天皇の時に、やって来た百濟
 風の城を造つて住んでいた所なのである
 。

解 説

伊和大神は在地の
 豪族の信仰する神で

あり、先住民の勢力を代表していると思
 えられる、去年に山くずりで有名にな
 った一宮町に伊和神社があり、伊和
 大神が祭られている。この神社は北
 向けに建つており興味深い。一宮は
 楯保川の上流で山奥にあり、山を越え
 れば養父町で出石とは意外近いとい
 う話を 出石神社の長尾氏に聞いた
 ことがあるが重要な指針である。

キムレ
 城牟礼山は、「キ」は防塞「ムレ」は
 山という意味の朝鮮語である、百濟
 人が城を作つた所が、日矛と伊和
 大神の伝承地になつているということは
 、朝鮮から渡来神人が何回もやって
 きて、先住民と争つたのか、やがて日矛
 と伊和大神の話になつていつたのであ
 ろうということを示している。

III-2. 筑前国風土記逸文

昔、仲哀天皇が熊襲を打とうとして筑紫に来た時、伊都国主の祖である五十跡手^{イトテ}が賢木^{さかき}を船の先に立て、上の板に王を、中の板に鏡を、下の板に鏡を掛けて穴内の列島に出むがえた。五十跡手は「高麗^{ソロ}の意居山に天から降ってきた日様の子孫の五十跡手です」と名乗った、天皇はほめて「格^イいことである。お前の国をいざの国と呼びなさい」と言った。今伊都と言うのは、訛^マ化しているからである。

解説 日矛と穴内、伊都

とは関係が深い。伊都国は邪馬台国論争に出てくる重要な国であり注目される。邪馬台国と日矛の関係もいくつかの説が出ている。仲哀天皇に日矛の子孫が降伏したと考えられるし、又仲哀天皇は九州ですでに死んでいるから別の解釈も可能であろう。

船に賢木や矛を立て鏡や王をかけるという話はよく出てくる。当時の宗教的儀礼であり注目される。

日本書紀の仲哀天皇の所に同じ内容の話が出ている。

IV 天之日矛の伝説について

日矛関係の主な資料は以上であるが、他にも多くの民間伝承があり、又、重要な問題実で書きもれてしまったのも多い。日矛の伝説には非常に多くの要素があり、簡単に後述出来る問題ではない。日矛の謎を一つ一つ解き明かすことが古代史の解明につながるであろうと思う。

皆さんと共に今後、これらの問題をじっくりと考えたいと願っているのがあります。

